



パネラー
松本美保子氏

テキスタイルデザイナーは「花」が描けなければいけないのか

私は、大学でテキスタイルデザインを教える立場にありますので今日ここにいる学生さん達に標準を合わせて話を進めます。

* テキスタイルデザインの原点

【日本に於けるテキスタイルデザイナーの祖は尾形光琳か】

かつて私の大学時代には「花」を沢山描くことから始まり、卒業後企業のデザイナーとしての仕事は「花柄を描く」ことが一番重要な仕事であったように思います。テキスタイルデザイナーの祖は、辿って行くと尾形光琳にたどり着きます。京都の高級呉服商「雁金屋」に生まれた尾形光琳、乾山兄弟は小袖や蒔絵などのデザイナーとして当時巷で知られる存在でした。彼等が描いた模様は「花を中心とした花鳥風月」でありましたし、その後を受け継いだ画家達によって描かれた模様も日本人の美意識が求める「花」であり「鳥」であり「自然」でありました。19世紀末になってヨーロッパから洋服と共に「洋風の花柄」が入ってきて「花」の種類と表現方法は多様化しましたが、今もこれからも「花柄」であり「花」は永遠のテーマなのでしょう。

* テキスタイルデザインの領域

【多様化してゆくテキスタイルデザイナーの仕事】

さきほど近沢さんの話で、企業内のテキスタイルデザイナーの仕事は、模様を描く事よりも、プランナーとかコーディネーターの仕事が多いとの事でした。今後仕事の内容は益々細分化され、専門分野化の傾向に向かって行くと思われま。そしてデザイナーに要求される事も多くなり、幅広い知識も必要となってきます。デザイナーは直接所属している企業の要求に答えて利益も考え売れる物を企画

■ フリーランスとしての私のやり方 ■

企業にも学校にも属さない、全くのフリーランスとして、私のやってきた事を話します。これからはばたこうとする人達のヒントになればと思います。フリーの立場は、生活の保証基盤がなく、また、テキスタイルデザイナーの存在も一般に希薄です。そのため漢字的「不利」と言うことにならないためにも ● 自分自身を保証すること ● テキスタイルデザイナーとしての「自分」を確立すること を考えました。その中に私のやり方は、5つのポイントとなるアクションがあります。

1. 出版物の発行

出版社の依頼で私のデザイン集を刊行することになりました。これはアナウンスの絶好のチャンスでした。その後も2年毎にデザイン画集、イメージ画集、写真画集などの発刊に恵まれ、出版物が私と私の作品を世間に紹介する媒体となり、顔の見えるデザイン活動を始めることができました。つまり、私と言う人間が私の感性によりテキスタイルデザインをしている事が認知されてのワークです。同時に出版物からの商品化が始動し、私のネームでのライセンス商品が売場に並ぶようになりました。この時、やっとテキスタイルデザイナーとしての市民権を得た実感がありました。

2. 海外へ目を向ける

80年代初頭に、国際的なファッション素材屋(INTER STOFF)に初めて日本からノミネートされデザイン出展、続いてHEIMTEXTILEにも出展、以後12年連続

し提案することも大切です。が、物作りに携わるデザイナーは、消費者の立場、使う人の立場で物を企画し提案する事も忘れないようにして欲しい。人間の事を、高齢化社会に向かっていることを、地球環境の事を、物を作り出すだけでなく使った後の事も考えられるテキスタイルデザイナーが要求されているはずですよ。

* テキスタイルデザインの教育

【学問体系がないテキスタイルデザインの教育】

テキスタイルデザインの基礎的教育は、かつて美術大学の工芸の分野に所属していました。日本の伝統工芸は、すばらしい技術の集積から極限に近い完成度の域にすでに達してしまっています。中でも織り、染めの分野は「技術の修練、修得により極めて行くもの」との概念が強くあり、学問体系とほど遠い「熟練と勤」の世界です。近年デザインの教育を主目的としている私共の大学のような芸術工科大学、造形大学が各地に新設され、大学院も修士過程が設置されるようになりました。そして新たな問題は、テキスタイルデザインの分野では理論として積み上げてゆく時のガイドとなる学問体系がないと言うことです。そこで提案ですが、テキスタイルデザイナーの社会的地位の向上の為にも、テキスタイル、ファッションなどの関連企業と大学とが協力して、テキスタイルデザインの大学院大学を作り、充実した資料館を持ち、大学人と企業人の共同指導を学生に対してだけでなく、社会人の再教育もできる開かれた教育機関ができればいいなと願っています。



パネラー
山本竜一氏



出展し、その間に、世界中の出展デザイナーを代表して公式記者会見でトレンドを発表したり、スイスの月刊誌インターモードに数回にわたり作品が紹介されるなどの事があり、海外へ向けて発信する舞台となりました。日本においても、「有利」な相乗効果を発揮しました。その他に 3. テキスタイル産地との関わり 18の産地の指導に関わり、このワークを通じてテキスタイル産業の根の部分を知り、デザインに膨らみを与える上で役立ちました。4. 自己投資 100%自己の五感からの感動のために投資する。ドキドキの新発見、それが創作活動の原動力です。5. 異分野の人との交流 例えば冒険家、音楽家、天文学者、海洋生物研究者など、異分野の知人友人との交流はスパイスのような役割があります。以上は、私のデザイン活動の中で5つのポイントですが、時代背景の上昇気流と、そして何よりも、私を理解して頂く良きビジネスパートナー達との出会いが、私のやり方で私の仕事を全うさせているようです。